再びその人らしい生活に

ふれあいひろば

2017年4月15日発行 Vol.80

愛仁会リハビリテーション病院

大阪府地域リハビリテーション
地域支援センター

- 住所：高槻市白梅町5番7号
- 電話：072-683-1212
- URL：http://aijinkai.or.jp

1面 Rプロジェクト進捗報告
2面 専門外来紹介⑥ ／ 副医院長・看護部長 就任あいさつ
3面 地域クリニックとの連携の中で⑮ ／ 認定看護師からのメッセージ③
4面 患者さまだより⑭ ／ 在宅サービスセンターだより

Rプロジェクト 進捗報告

今年の6月に予定されている高槻病院の第Ⅱ期開院で、現在愛仁会リハビリテーション病院の2・3階にある高槻病院の外来部門が、新築した病棟へ移転いたします。さらに現在8階にある透析部門も高槻病院の管轄に移行し、同様に新病棟へ移動となります。その移転後の空きスペースを有効に活用するため、昨年の6月から「Rプロジェクト」が進行しています。この名前は、われわれの使命であるRehabilitation（リハビリテーション）の"R"の頭文字であるとともに、Rebirth（再生）、Reborn（生まれ変わる）、Reform（改善）、Remake（再び作り上げる）といった、当リハビリテーション病院がさらに進化を遂げるための理想となる語の頭文字を取って、プロジェクトの名称としたものです。このプロジェクトの基本目標は、以下の4点を柱とすることとしています。

1. リハビリテーション機能の更なる充実を目指す。

2. 地域に開ける病院としての環境を目指す。

3. 満足度向上に向けた職場環境の整備を目指す。

4. 療養環境、アメニティの充実を目指す。

現在基本設計の策定が終了し、6月からの改修工事の開始に備えて、工程の調整や什器・備品の選定を進めております。

3階にあるリハビリテーション訓練室は、大きく拡張して2階に移転し、リハビリ外来・放射線・生理検査室の各部門とまとめて配置します。また同階には、義肢装具の採型や調整専用の部屋も確保し、さらに患者さまや御家族さまにお気軽に薬剤の相談をしていただけるように、お薬相談室も開設いたします。

現在透析部門と会議室のある8階には、42病床を増床して、4・5階病棟と同様の回復期病棟を増設いたします。入院患者さまの幅広い御要望に応えられるよう、新設の病棟には1床室・特室を計10床配置し、平成30年1月からの稼動を予定しています。

3階はJR高槻駅や高槻病院との連絡路に接続する病院の正面玄関となることから、愛仁会全体の「顔」として、「地域の医療と介護」に御利用いただけるよう、地域開放型のスペースとして活用していく予定としております。現在の高槻病院外来エントランスホールには、公開講座の開催などで地域住民の方々に御活用いただける"地域交流スペース"を配置するほか、"図書室・コモンズスペース"、"地域医療コンシェルジュ"といった、地域の医療従事者の方々と集い、対話ができる場を提供して参ります。また、現在1階にある在宅サービス部門を3階に移動して、これら各スペース間を動線的に繋いで、連携強化を図って参ります。全ての改修が終了するのは、平成30年11月になる予定です。

今回の「Rプロジェクト」を通じて、さらに患者さまに質の高いリハビリテーション医療を提供するとともに、地域の皆さまに貢献できる病院にしていけるよう、職員一丸でがんばって参ります。今後とも皆さま方のより一層の御支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

副院長　兒島 正裕

INTRODUCTION

専門外来紹介 Vol.6 心臓リハビリテーション

当院では2016年4月より心臓リハビリテーション外来を開設しております。

心血管疾患のため入院治療後には体力の低下などを認めていることがありますが、退院後も運動療法をはじめとした心臓リハビリテーションを継続して行うことで運動耐容能及び、不安やうつ状態の改善による生活の質が向上し、動脈硬化の予防や自覚症状の改善、再発率の低下にも有効であると考えられています。

急性期には入院中に身の回りの動作ができるようになることや段階的に活動量を増やしつつ、検査、治療も継続されます。退院後に回復期のリハビリとして外来通院での心臓リハビリテーションの継続が勧められています。退院後、間もない期間となりますので、自覚症状の確認や心拍数をモニター管理しながら適した運動の強さでトレーニングを行います。また、安定していることが確認できれば在宅での適度な運動も継続していただけるようにしていきます。

現在、当院では急性期治療を終えられた退院後、週に1日程度当院に通院され、トレッドミルやエルゴメーターなどを主とした運動療法を継続し、必要に応じて栄養指導なども受けていただけるようにすすめております。

2016年4月の開設時は週に1度の火曜日の午後のみの外来でありましたが、2017年2月より水曜日の午後にも通院していただけるよう対応可能な枠を増やしております。

心疾患の治療後の方で外来心臓リハビリテーションに通院していただければと考えておりますので宜しくお願い申し上げます。

心臓リハビリテーション外来に関するご質問やご相談・ご予約・費用に関するお問い合わせは下記までお気軽にご連絡下さい。

完全予約制

毎週火曜日 13時30分～
毎週水曜日 14時30分～（祝日除く）

受診前に必ずご予約（来院又は電話にて）をお取りください

就・任・あ・い・さ・つ

副院長　清水 洋志

このたび愛仁会リハビリテーション病院に着任いたしました清水洋志と申します。わたくしはこれまで、循環器内科専門医として虚血性心疾患、慢性心不全などの疾患治療に急性期から慢性期を通して携わって参りました。着任前までは愛仁会高槻病院にて2010年より7年間循環器内科の治療に従事してきましたので地域の皆様には大変お世話になって参りました。

わたくしが医師となりまして以来、循環器疾患の生命予後につながる画期的な薬剤や治療法がいくつかこの世に生まれて参りました。その一方、心疾患における積極的なリハビリテーションの導入が、それらの強力な薬物などによる治療に匹敵するだけの予後改善効果が得られることが報告されるようになり、心臓リハビリテーションに対する需要は近年非常に高まっております。

しかしながら一方、需要にこたえられるだけの医療機関の数にはまだ足りていないのが現状と思われます。当院ではこれまでも、主に外来心臓リハビリテーションを通してその一翼を担ってまいりましたが、さらなる拡大により地域の皆様のより一層のニーズにこたえていきたいと存じます。今後とも何卒ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

看護部長　後迫 瑞穂

このたび愛仁会しんあい病院・しんあいクリニックより、愛仁会リハビリテーション病院に転属となりました、後迫瑞穂と申します。しんあい病院、クリニックでは、地域に密着した医療を提供しております。現在の超高齢化社会が抱える数多くの問題を肌で感じ取ると同時に、高齢の皆様の長年生きてきた知恵やしなやかさ、強さも教えていただきました。

リハビリテーション病院に入院される患者さまは、病気や外傷が原因で、医療的なリハビリテーションが必要な方が多く入院されています。再びその人らしく、暮らすことができるよう、専門職種が連携して問題の解決に努めることが求められ、特に看護は、日常生活援助を通して、患者さまを尊重し、一緒に工夫していくことが大切と考えております。

「再びその人らしい生活に」リハビリテーション病院の理念です。まずその人らしい「笑顔」を取り戻し、日常生活のなかで、できることをひとつずつ積み重ね、職員も一緒に笑ったり泣いたりしながら、「生きる自信」に繋がる、そんな看護を目指しています。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

医療法人 けあき会

川尻クリニック

診療科目 脳神経外科・外科・リハビリテーション科

『地域クリニックとの連携の中で』は、今回茨木市で開業されています、川尻クリニック・川尻勝久院長先生にインタビューさせていただきました。

左：川尻院長
右：愛仁会リハビリテーション病院 砂田副院長

Q.クリニックの特徴を教えて下さい。

A 専門は脳神経外科です。生活習慣病（高血圧・脂質異常症・糖尿病など）を早期に、軽症のうちに発見することを目指しています。高齢化率が年々高まる中、脳卒中を患われる方々が、今後より多くなると思います。早期診断を目的として、MRI検査を当院で行い、必要時は急性期病院に早期紹介を行っています。また、頭痛・めまい・ふらつき・手足のしびれ・頭部打撲等の症状を専門として診ております。

Q.地域に脳神経外科を専門に標榜されている機関は少なく、当院からも、患者さんを紹介させて頂いております。連携面の問題点や、当院へのご要望についてお聞かせ下さい。

A 連携面について特に問題はないですよ。新たに紹介して頂く患者さんの情報もしっかり頂いていますし。急性期で患者さんを高槻病院にお願いすることがあります。その後は必要であれば、貴院で（入院）リハビリテーションを行ってもらえればと考えています。

川尻先生、お忙しい中インタビューさせて頂きありがとうございました。午前診が終わる時間帯に訪問致しましたが、まだまだ患者さんが多く、クリニックは賑わっていました。また、系列施設『淀川老人保健施設ウェルコティ』が大阪市淀川区にあります。淀川区にお住まいの患者さんも入院されていますので、退院後のリハビリテーションが必要な場合、改めてご相談させて頂きます。ありがとうございました。

（地域医療室 主任 巽）

〒567-0828
茨木市舟木町19-20 林泉第7ビル1階
TEL.072-632-0200

診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00～12:00	○	○	○	○	○	○
16:30～19:00	○	○	―	○	○	―

【休診日】水・土曜午後、日曜、祝日
夏期休暇及び年末年始：7日程度の休診あり
（なおMRI検査は月曜～金曜の9:00～19:00
土曜の9:00～12:00にも随時行っています）

認定看護師からのメッセージ VOL.3

安全においしく食べるための 介助方法

愛仁会
リハビリテーション病院
摂食嚥下障害
看護認定看護師
馬嶋 きみ代

日本における死因第3位は肺炎でそのほとんどは高齢者で、多くは「誤嚥性肺炎」と言われています。せっかく口から食べられるようになったのに、誤嚥性肺炎で再入院となるケースもあります。一口誤嚥したからといって、すぐに誤嚥性肺炎になるわけではありませんが、食事介助中の誤嚥は避けたいものです。

食事介助をするにあたって、まずは食べる前の準備が大切です。食事に集中できるよう食前にトイレを済ませ、食事をする環境や食べる姿勢を整え、口の中の汚れを取って潤し、飲み込みやすくします。スプーンは小さめで、スプーンホールが浅く、全体が舌の中央に接地できるサイズを選びます。カレースプーンのような大きなスプーンでは、口に取り込むときにすすってしまい、ムセを引き起こしてしまいます。また、こぼれを防ごうとして、さらに吸うことで姿勢の崩れや疲労につながります。スプーン操作では、認知機能を高めるために、ただすくって口に運ぶのではなく、食物を切る、すくうといった視覚情報を相手に、確実に見せることが重要です。できるのであれば、ご本人様にスプーンを持っていただき、手添えしながら動作を一緒に行うとより効果的です。

1日3回の食事介助は大変な労力です。介助する側、される側の互いの時間の共有が、楽しく、かけがえのない幸せな時間であり続けることを願っています。

INTERVIEW

患者さまだより⑭ インタビュー

Yさん（70代男性）

Yさんは、平成28年夏頃よりパーキンソン病で通院されており、秋頃に急激な悪化で急性期病院に入院。加療後、リハビリテーション目的で当院に転院されました。

当初は、食事を口にすることも難しく、起き上がる際には支えが必要な状況でした。起立性低血圧で立ち上がった時に目の前が真っ白になり、動けなくなるという症状があり、時間帯によっても調子の良い時、悪い時がありました。

2ヶ月ほどのリハビリで、調子の良い時には支えがなくても歩くことができるようになり、ご自宅に退院されました。

今回は、入院中に担当していたリハビリスタッフ、担当ケアマネジャー、訪問リハビリの担当者の方とご自宅へ訪問し、退院後の生活についてお話を伺いました。

Q 退院されてからどのように生活されていますか？

A.

【奥様】家に帰ってから、2，3日は奥様のお手伝いでベッドの脇で顔を拭いたりしていました。3日目頃からは調子も良くなり、自分で洗面やトイレなどにも行けるようになりました。デイケアにも通っています。昨日は調子が良く、資料の整理をしたり、仕事のチェックもできました。

Q 入院されている方に今お伝えしたいことはありますか？

A.

【ご本人】良いこと悪いこと等が出てくることに対して驚きや戸惑いがあるけれど、入院中に関わる人たちの言葉を信じて、自身の体力をつけるためにもリハビリを続ける方がいいと思います。入院生活は、人生の短い部分の一つやと思って頑張った方がいいんじゃないかな。

「家に帰れて良かった。」そんな当たり前と思っていたことが、病気をしたことで楽しみに思えたということが大きな変化です。

【奥様】病気との付き合いはこれからですが、なるべく家での生活を続けられるように、過ごしていきたいと思っています。

ご本人は、今日はあまり調子が良くないと言われていましたが、穏やかな表情と笑顔が印象的でした。「（家に帰って）良かった。（動けるようになって）すごいとみんな言ってくれるけれど、これが普通だよ」とお話しくださり、美味しいものを召し上がったり、生活のリズムを取り戻したり、Yさんらしい暮らしに戻られていることがとても伝わりました。奥様も不安がありながらもご主人との時間を大切に過ごされていることがわかりました。今回は、貴重な時間を頂きありがとうございました。

（地域医療室 井本）

愛仁会高槻 在宅サービスセンターだより

日常生活動作の獲得から職場復帰へ向けて

高槻在宅サービスセンター 訪問看護ステーション愛仁会高槻
理学療法士 科長 山口 勝生

身体能力の回復と職場復帰を目標に訪問リハビリテーションを受けておられるUさん（年齢40歳後半）を紹介します。

Uさんは、約1年前に脳出血による右片麻痺と失語症（理解していても言葉にできない状態）を患い、約半年の入院加療で愛仁会リハビリテーション病院からご自宅へ退院されました。現在訪問リハでは理学療法と言語聴覚療法を週1～2回ずつ利用されています。日々の練習により自宅内でできることが増え、現在は自宅内の生活や屋外歩行は、ほぼご自身のみでできるようになりました。

次の目標は職場復帰で、まず職場まで行くための交通機関の利用が問題でした。簡単なことのように思われるかもしれませんが、予想以上に困難なことが沢山あります。例えば駅のホームから電車、バス停からバスへの乗り移りの時の段差の昇降、乗車券の購入、もし座れなかった場合、車内で立ち続けることができるかどうかなど、様々な問題があります。

付き添いがあれば対応はできますが、「一人でもできるようになりたい」という強い気持ちを持たれています。それを叶えるために、身近なものを利用した課題（公園での段差昇降練習、側溝のまたぎ練習、つり革を持てるように杖を使用しない歩行練習など）を行ない、少しずつではありますができるようになっています。

在宅復帰ができたとしても自宅内で過ごすだけでは意欲は停滞しやすく、また自宅内に引きこもりがちになりやすいと言われています。不安感があっても練習により成功体験すれば自信につながり、気持ちが前向きになることを改めて実感しました。

今後、作業療法士も加わり、更なるコミュニケーションへのアプローチやパソコン練習など行い、Uさんの能力回復と職場復帰へ向けた支援を行っていきたいと思います。